

引用文献

- 寺嶋秀明. 2017. 「解題—掛谷誠の生態人類学, そのまぶしくもやさしい肖像」『掛谷誠著作集 第1巻 人と自然の生態学』京都大学学術出版会.
- 八塚春名・藤岡悠一郎. 2015. 「山村の特産品づくりを支える資源利用ネットワーク—滋賀県高島市朽木におけるトチ餅生産とトチノミ利用」『BIOSTORY』24: 94-106.

鈴木 董. 『オスマン帝国の世界秩序と外交』名古屋大学出版会, 2023年, 272 + 43 p.

松井真子*

本書の著者が、日本におけるオスマン史研究を牽引してきたことに異論はないであろう。オスマン語の一次史料利用どころか、それを収集するためのトルコへの渡航自体が未だめづらしかつた時代にイスタンブルに留学し、オスマン史のみならずその東西世界との比較や法学的理論との関係など幅広い視野で研究を進める一方、東京大学東洋文化研究所を拠点に後進の育成をつづけ、その薫陶を受けた門下生たちが今や国際的に活躍している。

著者の研究関心はオスマン史関連だけに絞っても幅広いが、あとがきにあるとおり、それは次の4点に集約される。

- ①アラビア文字世界としてのイスラム世界の
世界帝國的な存在であったオスマン帝国の
世界秩序観と諸政治体との関係の現実

- ②文化的多元社会であったオスマン社会の統
合と共存システムとそれを支えたアイデン
ティティの構造
- ③政治体としてのオスマン帝国を支えた支配
組織とその中核を担った支配エリートの特
色
- ④食文化から文学に至るオスマン文化の諸相

本書は主に①の分野を取り扱ったものである。著者は、このオスマン帝国の国際関係を論じる枠組みとしての比較文明史こそが研究の出発点であったとふりかえる。その捉え方について著者は「文字世界」という独自の概念を提唱し、それは本書でも採用されている。さらにオスマン帝国の比較対象として日本と中国を挙げ、その3点比較（試論として第5章と第9章）に今後本格的に取り組むとの表明がなされており、著者によるさらなる研究成果が待たれる。

本書の構成は以下のとおりである。

序章 イスラム的世界帝国としてのオスマン帝国

第一部 オスマン帝国の世界秩序

第1章 イスラム世界の「内」と「外」
—境界・言語・移動

第2章 オスマン帝国の異文化集団支配

第3章 イスラム国際法とオスマン帝国
の外交

第4章 オスマン帝国の世界秩序観と国
際関係の変容

第5章 オスマン帝国の対外交渉行動

第二部 オスマン帝国と近代西欧国際体系

* 愛知学院大学文学部

第6章 ウィーン派遣大使と『ウィーン使節記』

第7章 パリ派遣大使と『フランス使節記』

第8章 オスマン帝国とフランス革命

第9章 オスマン帝国の在外公館網の拡大

第10章 オスマン帝国と第一次世界大戦

このうち、第1章と第7章第2節が書き下ろしであり、他は1985年から2014年までに刊行された既発表論文からなる（初出一覧参照）。第一部は、オスマン帝国の世界秩序観とその外交への反映を主に理論的側面から解き明かし、その解体を近代「西欧の衝撃」との関連から提示する。第二部ではその枠組みが実際どのように歴史的に展開されたのが、事例研究によって検証される。

以下各章ごとにより詳しく内容を紹介する。第1章では、唯一のグローバル・システムとしての近代世界体系が成立する以前の諸世界があったことを前提として議論が進む。著者はこれを5つの文字世界に大きくわけ、そのひとつアラビア文字世界がほぼイスラム世界に同定できるものとして提示する。そして世界をイスラム法が十全に機能する「イスラムの家」と「戦争の家」に二分して捉えるイスラムの世界秩序観が説明され、さらにそれを原理として多宗教・多民族・多言語空間を統合したオスマン帝国が、空間的広がりとしても時間的長さからしてもアッバース朝と並ぶイスラム的世界帝国として現出したことを示す。第2章ではこの異文化

空間が何よりも宗教を基盤として集団編成されていたこと、そしてそれがナショナリズムの流入により解体されていく像が描きだされる。第3章では、前述のイスラム法の一分野としてのイスラム国際法シヤルが、異文化世界との接触において、異教徒の処遇をめぐり理論化されていたことが明らかにされる。第4章ではこの理念に基づいたオスマン帝国の国際関係が建国期から、条約締結と使節往来を指標に時系列にそって概括され、それが帝国優位から近代西欧優位への力関係逆転のなかで変容を余儀なくされ、最終的に近代西欧国際法の受容、近代国際体系への包摂にむかう過程が記述される。第5章では帝国の対外交渉が、西欧との関係において、戦争を主体としたものから交渉の選択へ変化していく過程が、内部エリートの動向との関連もふくめて描かれさらには日本の事例との比較も試みられる。

第二部の諸章ではより具体的な歴史事象が取り上げられる。第6章と第7章では、帝国史の後期の始めである18世紀初頭（本書は1699年カルロヴィッツ条約でオスマン史を大きく二分する時代区分をとる）に西欧に派遣された使節とその使節記を取り上げる。ウィーンに派遣されたイブラヒム・パシャと『フランス使節記』で有名なイルミセキズ・チェレビであり、それまで西欧に習うべきところはないとしてきたオスマン政府の少なくとも一部に、西欧に習おうとする姿勢が見られ始めたことを描出する。第8章はフランス革命を事例に、18世紀末の国際関係の転換が読み解かれる。フランス革命は、当初西

欧の情報に密接に接していたはずの非ムスリム臣民の間にすらほとんどその重要性と影響は認知されなかったこと、しかしナポレオンのエジプト遠征を経て、ハプスブルクやロシアを共通の敵としてきた長年の友邦国フランスと戦火を交えることによって、革命の長期的な影響が警戒されるようになっていったこと、さらにそれが後に列強の進出のみならず、ナショナリズムという内部からの民族分離独立による解体を促していった点を明らかにする。第9章では帝国の在外公館網の拡大が扱われる。従来オスマン帝国に西欧諸国は常駐使節（帝都への大使のみならず帝国内諸都市への領事を含む）が派遣されていたにもかかわらず、帝国側は西欧に必要に応じ臨時に使節を派遣するのみであった。しかし18世紀末に初めて常駐使節派遣が試みられ、紆余曲折をへて19世紀前半に確立していく。さらに在外公館網の拡大が日本や中国の事例と比較検討される。第10章では、ハプスブルク／オーストリア、ロシア、イギリス、フランス、プロイセン／ドイツとの関係を軸に第一次世界大戦前後のオスマン帝国の国際関係が叙述され、帝国解体とトルコ共和国および旧オスマン領のバルカン諸国の独立・植民

地支配の下での中東諸国体制の成立が描かれ本論が閉じられる。

このような壮大な比較史の構想のもとに書かれた本書が、帝国の対外関係や比較研究をこころざす者の筆頭参照文献のひとつとなることは間違いない。読者は本書を通じて、著者の研究がどのように発展したかを辿ることで、1980年代以降のオスマン対外関係史の学説史的展開を捉えることができる。本書をもとに、たとえば「条約」に関しては Theunissen や Kołodziejczyk のアフドナーメ研究、外交儀礼については Karateke の研究、モルドヴァやワラキアをめぐる国際関係に関しては Panaite や黛氏の研究など、各章の初出以後に発表されてきた内外の研究成果を参照しつつ、後続の研究者によってオスマン史がさらに発展していくことが望まれる。

なお本書は、上述のとおり著者のオスマン帝国をめぐる国際関係に特に焦点をあてた研究の成果をまとめたものである。帝国内部の問題も扱われているが、帝国解体にともなって噴出し今なお進行中の旧オスマン領におけるさまざまなネイション・ステイトのアポリアについては、著者による帝国解体やナショナリズムに関する研究も参照されたい。